

25th
SHINCHO
CREST BOOKS
25TH ANNIVERSARY



No Foreign Literature,
No Life.

illustration by Naoki Ando

新潮クレスト・ブックス 2023-2024

FREE
ご自由に
お取りください

[インタビュー]

ジュンパ・ラヒリ 「探しまわること。見つけること。」

西加奈子 「私を支え続けてくれた、クレスト・ブックスの作家たち。」

[近刊紹介] マルコ・バルツァーノ

ただいま翻訳中! これから出るクレスト・ブックス

新潮クレスト・ブックス カタログ 1998-2023

SINCE 1998
C R E S T
B O O K S
Shinchosha

ジュンパ・ラヒリの最新作『思い出すこと』は、英語で創作活動を始め、何年も前からイタリア語でも創作を続けている彼女の初の詩集である。だが、ラヒリのイタリア語での活動はこれに留まらず、イタリア語の作品を英語に翻訳し（ドメニコ・スタルノーネの『靴ひも』など）、最近ではあまり知られていないイタリア人作家たちの短篇集の編纂も行っている。

新しい言語的な挑戦にも乗り出して、「わたしのいるところ」の英語版では、作家と翻訳家の二つの役割を同時にこなしている。

『思い出すこと』でも、ラヒリはいくつかの役を同時に担っている。序文において、ラヒリはもっともらしい叙述の枠組みを創り出す。本書に収録されている詩は、ネリーナという無名の作者が机の引き出しに残っていたノートに記されていたもので、ラヒリはローマのアパートでそれを見つけたというのだ。

従って、この枠組みのなかでラヒリは、編者であり、詩の作者ではない。だが、多くの詩のなかにラヒリ自身との類似点が見つかるのは明らかである。この文学的試みにおいて、注は余分なものではなく、作品の重要な構成要素となっていて、ラヒリは文芸評論家、言語学者としても登場しているのである。

詩集に取められた詩は、イタリアやイギリスの偉大な詩人の引用に、自然で奥深い日常的面面が結びついている。失くしたり見つかったりした品物、象徴的な過去の一瞬、遠い場所や近く、場所、亡くなった人、甘やかであると同時

探しまわること。 見つけること。

ジュンパ・ラヒリの最新刊『思い出すこと』は、はじめての「詩集」。

この本のなかでラヒリは、ネリーナという詩人、彼女を発見した作家の自分、作品を解説する文学研究者の三役を担っている。詩という形式を取ったもっとも自伝的なこのイタリア語作品をめぐるインタビュー。

ジュンパ・ラヒリ

interview with Jhumpa Lahiri

ナディア・コルヴィーノ 聞き手

翻訳 中嶋浩郎

interview by Nadia Corvino
translated by Hiroo Nakajima

interview

photograph © Marco Deloquo

に痛みをとともう情緒的繋がりなどにしばしば焦点が当てられている。言葉の意味の意外なゲーム性に注目した詩や、行間に隠された意味を明らかにしてゆく注など、言葉遊びも多く見られる。

「イル・リブライオ」は作者にインタビューを行い、『思い出すこと』や現在の自身の文学的状况について語ってもらった。

——あなたはこれまで長篇小説、短篇集、エッセイを書いてきましたが、詩を書くことと思われたのはどんな理由からですか？

実際のところ、選択したわけではなく、これらの詩は自然に生まれてきたものなんです。わたしはこれまで英語の詩について学んできて、深い知識を得てはいましたが、英語ですら詩を書いたことがありませんでした。書くことがしばしば読んでいるものへの返答であるという意味で、読むことが書くことにつながったのです。このような方法で表現する能力が自分にあるとは思っていませんでした。「わたしのいるところ」の出版のためにローマにいたところ、詩という表現形式を取るようになり、それからこの道を歩みはじめました。

——『Rovinate』探しまわる」という詩の注で、あなたは「紛失という主題をたどる作品の鍵となる言葉」と書いています。しかし、見つけた品物という別の赤い糸があり、それは紛失とは反対の発見というテーマを暗示しているように思えます。失って見つけた物、これは一つの赤い糸で



Jhumpa Lahiri

1967年、ロンドン生まれ。
両親ともコルカタ出身のベンガル人。
2歳で渡米。99年「病気の通訳」で
O・ヘンリー賞、同作収録の『停電の夜に』で
ピュリツァー賞、PEN／ヘミングウェイ賞ほか
受賞。2003年、『その名にちなんで』発表。
08年刊行の『見知らぬ場所』で
フランク・オコナー国際短篇賞受賞。
13年、『低地』を発表。家族とともにローマに
移住し、イタリア語での創作を開始。
15年、エッセイ『べつの言葉で』、
18年、小説『わたしのいるところ』を発表。
22年からコロンビア大学で教鞭を執る。



photograph by Yusuda Misuzu

『思い出すこと』中嶋浩郎訳
本体2000円〔税別〕

す。それは「わたしのいるところ」にも、もっと細い形ですが存在していました。わたしにとって「探しまわる」と「見つける」ことは同じメダルの裏表です。探しまわる——一生懸命探す——行為は、つねに欠けているものとの対話関係にあります。それはわたしたちを失くした品物、あるいは一つの発見（ネリーナのノートが引き出しのなかを探したことで見つかったように）に導いてくれます。わたしにとって「探しまわる」という言葉はとても不思議な力をもっています。「再び出会う」というラテン語に由来するこの言葉が、わたしにとって書くことの出発点なのです。「探しまわる」意味に深く関わる「わたしたちが知らなければならぬのは、一度見ただけでは物事を理解することはできず、二度見てようやくわかるということだ」というパヴェーゼの考察にわたしは強い印象を受けました。再び出会うことは「語義」の章のテーマでもあり、そこにはイタリア語の単語に注目し、べつの言語で自分自身に再び出会おうとする考えがあります。また、いくつかの詩はわたしがローマに移ってからの経験だけでなく、子ども時代や遠い過去に根ざしています。はるか遠い過去に遡るためにイタリア語を使ったという事に衝撃を受けています。

——再び出会えましたか？

実際のところ、すべては試みです。ですが、新たなゴールに到達したとは思っています。新しい言葉、すなわちイタリア語の一部である詩の言葉を発見したのですから。このことによっ

は一つの歩みであることをわかせてくれるのです。

——いまはあなたの作家生活にとっても素晴らしい時期のようです。ほかのプロジェクトにも取りかかっていますか？

はい、パンデミックを除けば、とても充実しています、今年の仕事ばかりしています。近年、翻訳もはじめました。秋にはドメニコ・スタルノーネの*Confidenza*（信頼）の英訳が出ますし、来年にはもう一つわたしのイタリア語の作品、短篇集が出版されるはずです。あと、翻訳をテーマにしたエッセイを集めた英語の本をいま仕上げています。さらに、オウディウス（『変身物語』）のラテン語から英語への翻訳にも取りかかっています。同僚のラテン語学者といっしょにこのすばらしい山を登っているところです。このプロジェクトは長い時間と細心の注

で、これまでは捉えられなかったことを掘り下げ、理解できるようにしました。真実に到達しようとする試みはつねに存在します。その意味で、この本は一つの試みなのです。すべてを語りつくすことは決してできませんから。何らかの方法である領域に触れたとしても、それは決定的なものではなく、当然またべつの本を書くこととなります。記憶や経験はだんだん薄らぐもので、ずっと留めておくことは不可能です。——ちょうどこの時期、あなたがイタリア語で書いた『わたしのいるところ』をご自分で英訳なさった

**日常生活の行きつもどりつが、
人生は一つの歩みであること
を
わからせてくれるのです。**

本が出版されました。自作を翻訳するのはどんな経験でしたか？

大いに啓発されました。自分の本が変わる過程を体験したのですから。それから、翻訳することでもう一度イタリア語のテキストに立ち返ることができました。ある言語からべつの言語に移るたび、言語的な新たな変化と新たな認識が生まれるのです。翻訳するにはその本を深く掘り下げることが必要で、必然的に原文を整えたり推敲したりすることになりました。こうして、わたしはかつて歩いた道にもどって歩き直

すことになったのです。それは、論評、序文、詩、注のある、この新しい本のテーマでもあると思います。

——詩人と監修者という二つの役割をこなし、自身の詩に注をつけるという選択は自分の作品を翻訳する経験と同一視できますか？

翻訳中、わたしはある錯覚に陥っていました。同じ人間でありながら、本に対して異なる態度を取ることを要求されているように感じていたのです。『思い出すこと』では自分ではないネリーナという詩人のオルター・エゴを、彼女のアイデンティティーの背後に隠れることなくつくりだしました。わたしは詩の監修者、注釈者でもあるので、実際そこには三つのアイデンティティーがあります。ある意味で『思い出すこと』は、わたしの近年の活動のすべてを含んでいるのです。『イタリア短篇集』を編纂した経験も役に立っています。

——詩のテーマにもどると、もう一つの重要な要素は、自然で奥深い日常生活です。それはあなたにとってどんな価値をもつものですか？

わたしにとって、奥深さのすべてがそこにあります。日常生活はつねにわたしが人生の意味を考えるための鍵でした。それはわたしの言語であり、多くの作家の言語です。とくに詩においては、日常生活への留意を表現することが可能です。過ぎていく一日、習慣、さほど重要でないように見えて、じつは生活の中心にある物。そうした物をわたしたちは使い、失い、求め、欲します。日常生活の行きつもどりつが、人生

意を必要とします。ラテン語を勉強したのはずっと昔のことで、思い出さなければならぬことが多く、たいへん刺激的です。毎日20〜30節の詩句に取り組むことはとても楽しく、純粹で明確な注意を言葉に向けることができています。このところたくさんこのことを経験したので、これからのなにか起こるか自分でもわかりません。

——パンデミックはあなたがこれまで以上に多い活動をするのを可能にしましたが、テーマの面でも影響を受けるでしょうか？

それはなんとも言えません。まだ終わっていませんから。多くの親しい人が依然として厳しい状況のインドにいたり、完全に自由だと感じられません。この時期経験してきたことすべてが、いい意味でも悪い意味でも人生を変えるのは間違いありませんが、たとえば、

誕生や喪失のことを思います。わたしは今年、母を亡くしましたが、間もなく出る本のなかでは生きています。だからこそ、この作品のなかでの考察はとても重要な意味をもっています。わたしの創作に変化があるかどうかはわかりませんが、いま、自然との関係にますます感銘を受けるようになっていきます。それは決して失われることのないレベルであり、わたしはそのなかに自分自身を見出ししています。詩はこのテーマを掘り下げるのを助けくれるのではないでしょうが。

(2021.6.14)

LA POESIA È IL LINGUAGGIO DEL QUOTIDIANO
Published in Il Librai.it
Jhumpa Lahiri interviewed by Nadia Corvino
Copyright © <https://www.ilibrain.it/>
Permissions granted by Il Librai.it
via Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

私を支え続けてくれた、 クレスト・ブックスの作家たち。

今年4月、乳がん発覚から治療を終えるまでを綴ったノンフィクション『くもをさがす』(河出書房新社)を刊行した西加奈子さん。そこには辛い治療の日々の中で、新潮クレスト・ブックスを含む、数々の海外文学作品の一節が引用され、心の糧となっていた。

西加奈子 interview with Kanako Nishi



——まずは西さんと新潮クレスト・ブックスとの出会いについて教えていただけますか。

私は17歳の時にトニ・モリスンの『青い眼がほしい』(早川書房)を読んで強い感銘を受けて、それ以来、海外文学の棚によく行くようになったんです。それで、確か「来たるべき作家たち」(1998年刊)というムック本でクレストが創刊することを知ったんだと思います。最初に読んだのは、ゼイディー・スミス『ホワイト・ティース』(2001年刊・品切れ)で、とても衝撃を受けました。今は中公文庫に入っていて、その帯推薦文を書くときに再読しましたが、衝撃が薄れていなくて。本が出た当時はまだ9・11も起きておらず、宗教や人種の違いによる分断を今ほどは意識せずに済んだ時代でしたが、どんな宗教、人種であっても人間であることに変わりはないという著者のスタンスに心を掴まれました。

次に夢中になったのは、ジュンパ・ラヒリでした。『停電の夜に』(2000年刊)を読んで、それ以降の作品はすべて読んでいます。とりわけ、『その名にちなんで』(2004年刊・品切れ)、『低地』(2014年刊)は素晴らしく、私の中でクレスト・ブックスへの絶対的な信頼感が生ま

れたのもラヒリのおかげです。

彼女はカルカッタ出身の親世代と、アメリカで育った世代との違いをベースに描いていて、それは移民ならではの面もありますが、考えてみれば私たち日本人にだって世代的ギャップはあるんじゃないですか。翻訳小説が好きというし、「日本とは違う遠い世界を知ることができからですか」とよく訊かれますが、もちろんそういう面もありますけど、ベンガル出身の登場人物の中に、自分と同じ感情を見ることがある。私はそこに希望を感じるんです。スミスのように、ラヒリの筆にも静かなユーモアがあるので、悲劇も残酷なことも、人間の愚かさとして、とても身近に感じられる。

勉強されていて、文学的な土壌が豊かで、翻訳がいかに大切かを常におっしゃっていますよね。
彼女はロンドン生まれ、アメリカ育ちで、ずっと英語で教育されてきたんですよ。海外の本を読むことがすごく大きな経験だったんだろうなと想像します。でも少し前までのアメリカでは一般的にはあまり海外文学を読む習慣がなかったと聞きました。ナイジェリア出身の作家アディーチエは、大学留学で渡米したときにクラスメイトに「ナイジェリアの小説を読んだけど、夫が妻にDVする話で、とても残念な国なのね」ということを言われたそうなんです。でも彼女は茶目っ気たっぷりなんです。「私は『アメリカン・サイコ』を読んだけど、アメリカ人が全員サイコ

私とクレスト・ブックス①

ゼイディー・スミス
『ホワイト・ティース』(上・下)
ジュンパ・ラヒリ
『停電の夜に』
『その名にちなんで』『低地』

『ホワイト・ティース』は衝撃的で、20代でこの作品に出会えてよかった。今読み直しても本当に面白い。ラヒリの筆にも静かなユーモアがあるので、悲劇も残酷なことも、人間の愚かさとして、とても身近に感じられる。



photographs by Teudra Mutsaers

私とクレスト・ブックス②

ナム・リー
『ボート』
オーシャン・ヴオン
『地上で僕らは
つかの間きらめく』

難民をアイデンティティにしたくなかったナム・リー。自身が難民で、セクシャル・マイノリティであることを積極的に書くオーシャン・ヴオン。この10年で時代は変わった。



パスとは思わなかったわ」と返したそうです。一冊の本がその国の文化を代表できるわけもなく、私もいろんな国の翻訳小説をもっとたくさん読みたいと思います。

——クレスト創刊20周年の小冊子アンケートでは、ナム・リー『ボート』(2010年刊・品切れ)を「わたしの3冊」に挙げられていました。

オーシャン・ヴオン『地上で僕らはつかの間きらめく』(2021年刊)では推薦文を書かせていただきました。移民文学で強烈な印象が残っているのは、どちらもベトナム系ですね。ナム・リーは「難民」をアイデンティティにして作品を描くことを冒険では避けて、アイオワ、テヘラン、ヒロシマと、できるだけ違う世界を書いていきますよね。それは逆に言うと、彼がどれだけ難民である

ことをアイデンティティにさせられてきたかの証左ではないかと思えます。でもオーシャン・ヴオンは、難民という自分のアイデンティティを書くことに感がないように感じます。それは彼の母、祖母のストーリーの骨子であることを隠さない。自分について書く、ということはヴオンが詩人であることも大きいかもしれません。とにかくパーソナルな事柄が、アートのテクニックな世界へと跳躍することに繋がっている作家だと思えます。同じベトナム系でも、時代の変化を感じますね。

——では、この近年ではどのような作品をお読みになっていますか。
最近ではアリ・スミスに夢中です。最初に『両方になる』(2018年刊)を読んだとき、「なんやこれ?」と驚きました。手当たり次第友人に

「アリ・スミス読んだ？」と聞きまくるぐらいの衝撃でした。ゼイディー・スミスとおなじスミスで、どこか作風にも共通するところがあって、ユーモアと皮肉と優しさを感じます。登場人物を絶対に駒として扱っていないし、とても驚いたのは、実在する15世紀の画家の存在を描き直す、そのやり方です。時代を再考証する作品は過去にもあったと思うのですが、それが全く新しいものとして、現実とリンクしているのが本当に衝撃的でした。

『秋』（2020年刊）から始まる四季四部作（『冬』2021年刊、『春』『夏』2022年刊）は、「思想信条の違いがあるなかで、どうやって人びとが共に生きていくか」ということがテーマになっていくと思います。いま世界中で分断が起きていて、自分は

私とクレスト・ブックス③

アリ・スミス 『両方になる』 『秋』『冬』『春』『夏』

いま世界中で分断が起きていて、自分もその分断を止めようとする側にいるつもりですけど、一読者の立場からすれば、「小説家はアリ・スミスがいてくれるから大丈夫」と思う。



作家としてその分断を止めようとする側にいるつもりですけど、同時に一読者の立場からすれば、「アリ・スミスがいてくれるから大丈夫、希望はある」と思うぐらいの頼もしい存在です。彼女が出演するチエルトナム文学祭を観に行ったことがあるのですが、本当に素敵な方でした。

——シェイクスピアの妻を新しい視点で描いた、マギー・オファール『ハムネット』（2021年刊）もお読みください。

もし、『両方になる』を読んでいなかったら、『ハムネット』はもっと驚いたと思いますけど、本当に素敵な小説ですよ。小説は、人間の尊厳をこんな鮮やかなやり方で取り戻すこともできるんですよ。歴史は正しいものだと思ふみにすがりますが、誰がどう語るかによっても歴史上の人物の見え方はいくらでも変わります。悪妻と呼ばれたシェイク

私とクレスト・ブックス④

マギー・オファール 『ハムネット』 リュドミラ・ウリツカヤ 『緑の天幕』

オファールの小説を読んで、小説は歴史上の人物の尊厳を取り戻すこともできるんだと驚いた。遠いロシアの話だと思っていたことが、決して遠い出来事ではないと思わせてくれるのが、ウリツカヤの小説。



ることができません。

ロシアに話を戻すと、ウリツカヤの大作『緑の天幕』（2021年刊）は、ソビエト連邦で生まれた3人の主人公を軸に、厳しい抑圧の中で生きるロシア人の姿を描いています。彼らの心情に寄り添うことで、ニュースだけではわからないことが見えてくるし、遠いロシアの話だと思っていたことが、自分の人生でも「ありえたかもしれない」と思えるようになる

る。それが物語の果たす大きな役割の一つではないかと思うのです。

——最後に、西さんにとって小説を読むということとは、どのような意味を持つとお考えですか。

自分がピンチになったとき、寂しいとき、しんどいときに、「待てよ、この感情はなんか知っているな」と思うことがよくあります。それはだいたい、どこかの小説で読んだ、主人公や登場人物が感じたことである

私とクレスト・ブックス⑤

ソナーリ・デラニヤガラ 『波』 シーグリッド・ヌーネス 『友だち』

この回想録は、100人が津波で亡くなれば、100の人生があったことをイメージさせる。『友だち』の主人公女性はいわば私よりも先に孤独になってくれたのです。



ズ『終わりの感覚』（2012年刊・品切れ）に出てきた、あの感じかな」とか。ものすごく単純な言い方をする

ないと思っただけですが、これまで数限りない小説の中で、「死ぬかも」「怖い」という気持ちや、すでに疑似体験してきたんですね。逆もそうです。

例えばシーグリッド・ヌーネス『友だち』（2020年刊）は、初老の主人公女性が親しくしていた男友だちを喪う話ですが、この本の中で、彼女は私よりも先に孤独になってくれた。死んだ人にもう会えないことのつらさ寂しさを、私よりも先に「体験してくれて」いたんです。

他にも、自分が意地悪な気持ちになったときや、知らず知らずのうちに人を傷つけてしまったときにも、『ああ、これはジュリアン・バー

と、「私はひとりじゃない」と思えることが、私にとって小説を読むことの意味の一つにはなっています。

小説は法律ではなく、拘束力も命令する力もない。ただ誰かに選ばれるのを待っている一冊の本に過ぎない。そして選ばれ、読まれたとしても、そこから何を導くかは読者に圧倒的にゆだねられている。小説があることで生きてゆける、という私の気持ちも、私が小説から「得たもの」ではない。この、小説との距離感という関係性を、私はとても信頼しています。



Kanako Nishi
1977年生まれ。2004年に『あおい』でデビュー。07年『通天閣』で織田作之助賞、13年『ふくわらい』で河合準雄物語賞、15年に『サラバ!』で直木賞を受賞。他著書に『ふる』『夜が明ける』『くもをさがす』等。

ただいま翻訳中!

今秋以降に刊行を予定している注目の作品を、それぞれの翻訳者の方々にご紹介いただきました。来年、没後100年を迎えるフランツ・カフカへの恋人ミレナからの手紙を想像力で描いた作品や、ルーヴル美術館の至宝モナ・リザの修復をテーマに話題沸騰の新人などを紹介します。



photograph by Takahito Mitsuhashi

※タイトルはすべて仮題です。

『失われたピアノを求めて』

クオ・チャンシェン
The Piano Tuner by Kuo Chiang - Sheng

倉本知明
text by Kuramoto Tomoaki



天賦の才をもちながらも音楽に背を向けて生きてきた調律師の「わたし」はある日妻を喪った初老の男性「林サン」と出逢う。若い亡妻の残したピアノをめぐって、本来交わ

はずのなかった二人の運命は絡み合い、やがて中古ピアノの販売事業を手掛けるなかで、それまで目をそらし続けてきたそれぞれの過去と向き合うことになる。物語では、自らの感情を抑えて生きてきた「わたし」の人生が、シュベルトにラフマニフ、リヒテルやグールドといったクラシック音楽の巨匠たちの抱えた孤独と重ねて語られる。やり場のない感情を抱えた二人の旅路は、やがて運命の地ニューヨークへたどり着く。廃棄された中古ピアノを見つめる「わたし」は、自分でも思わぬ行動をとって周囲を驚かすが……。台湾で最も影響力のある文学賞の一つとされる台湾文学奨金典奨を受賞した中編小説。

(二〇二四年春刊行予定)

『ミケランジェロの焰』

コスタンティーノ・ドラッツィオ
Michelangelo. Io sono fuoco by Costantino D'Orazio

上野真弓
text by Ueno Mayumi



五〇〇年余りの時を超え、ルネサンスの巨匠ミケランジェロが自身を語る! 本書は、史実を基にして展開する自叙伝形式の物語だ。死を迎える前に波乱万丈の人生と芸術への想いを甥に伝えておきたい、そんな劇的な状況から始まる。

ヴァアティカン彫刻「ピエタ」や天井画「創世記」で不動の名声を得た天才の人生は、実は過酷なものだった。毒親のような父との関係、熾烈な競争社会に渦巻く嫉妬とライバルとの確執、権力者と政治に翻弄され、宗教的葛藤も抱えた。偏屈で思い込みが激しく人間関係をもまく築けない性格は発達障害を思わせる。男色家と言われるが女性にも恋をする。自らの信念を作品に込め、作風は変化していき、対抗宗教改革時の晩年には批判と憎悪の対象となる。情熱と苦悩。激動の時代を生きたミケランジェロの物語は、混迷する二一世紀を生きる私たちの心に響く。

(二〇二三年十一月刊行予定)

『モナ・リザを溶かしてゆく』

ポール・サン・ブリ
L'allègement des vernis by Paul Saint Bris

吉田洋之
text by Yoshida Hiroyuki



ルーヴル美術館の学芸員オレリアンは長い歳月を経て表面を覆うニス酸化で変色した、世界で最も愛される絵画「モナ・リザ」の修復を命じられ途方に暮れる。

一方、ルーヴルの若き清掃員オメロは彫刻や絵画の歴史的傑作群の合間を自在に駆け抜け、踊る。それが彼にとって芸術を感じる唯一の方法だった。思いもかけない結末へ向かう「モナ・リザ」を愛して止まない二人の運命は……天才修復師を求めてフィレンツェへ向かう旅。美が大量消費の対象となったSNS時代における美に対する意識の変容。そして愛の物語。ダ・ヴィンチが晩年を過ごしたクロ・リユセ城で育った、異色の背景を持つポール・サン・ブリの驚愕の処女作。アートディレクターである美意識高き作家の描く本作はまるで壮大な絵画を見るかのよう。今年一月の出版から時をおかず、ムリス文学賞、オランジュ文学賞他、数々の文学賞を受賞。

(二〇二四年夏刊行予定)

『カフカへの手紙』

マリ=フィリップ・ジョンシュレー
J'avance dans votre labyrinthe by Marie-Philippe Joncheray

村松潔
text by Muramatsu Kiyoshi



フランツ・カフカは手紙魔だった。彼の何度かの恋愛も、夥しい手紙を書くことで燃え上がっていったようで、なか

でも、『ミレナへの手紙』は「絶望と歓喜、自虐と屈従の入り乱れた酒神祭のような、すさまじい恋愛小説」(ウィリー・ハース、辻理訳)だとさえ言われ、カフカという人間を作品とは別の角度から照射する重要な資料になっている。

ただし、残されているのはカフカの手紙だけで、ミレナからの手紙はまったく残っていない。

その空隙を想像力で埋めようとしたのが本書である。著者はフランス人で、仏訳版『ミレナへの手紙』を読むうちに、その文章全体に染み渡るミレナという女のあまりにも生々しい存在感に衝き動かされて、黙っていたことができなくなり、自分がミレナになったかのように返事を書き、カフカとのやりとりをみずから生きずにはいられたかったのだという。

(二〇二四年春刊行予定)

『スイマーズ』

ジュリー・オオツカ
The Swimmers by Julie Otsuka

小竹由美子
text by Kotake Yumiko



『屋根裏の仏さま』に続くジュリー・オオツカの三作目は、街中の地下深くにある公共プールでひたすらレーンを往復すること

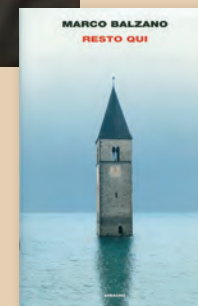
を生活の核とする「わたしたち」水泳愛好家、スイマーズの語りで始まる。やがてプールに奇妙なひびが出現し、施設は閉鎖。そして、スイマーズの一人で認知症を発症しかけていた高齢者アリスへと物語は移行する。

現在に至るアリスの人生の断片が重ねられ、そこに一人の日系人女性とその家族の姿が、認知症という病の切なさがつきりと浮かぶ。そして、作者自身と重なる、母の人生の最も辛かった時期を小説に書いた作家である「あなた」の後悔の念が、抑制の効いた文章の余白に濃くにじむ。親の思いが子にしみじみ感じられるのは、えてしてもう手遅れになってからなのだ。最後の、小さな灯のような情景が、読後いつまでも心に残る。

(二〇二四年夏刊行予定)



Marco Balzano
Resto qui [2018]



独伊のはざまにダム湖に沈んだ村

マルコ・バルツァーノ『この村にとどまる』

関口英子訳 2024年初旬刊行予定

ファシズム、失われた母語、戦争……。

母から娘へ、決して忘れてはいけない村の歴史。

関口英子・文
text by Sekiguchi Eiko

アルプスの山々に囲まれた南チロル地方は、古くからイタリアとオーストリアの係争地であり、国境線が何度も引き直されてきた。今こそイタリアの自治州となっているが、住民の大半はドイツ語を話す。そんな歴史のひずむ地に、湖面からロマネスク様式の鐘楼がそびえる美しい湖がある。幻想的な景観に惹きつけられて大勢の観光客が訪れるものの、湖底に沈められたものにまで思いを馳せる者はあまりいない。

そこにはかつて、土地を耕し、牛や羊を放牧しながら、独自の文化や言語を守ってきた村があった。本書は、その村に生を享けた女性、トリーナとその家族の、ファシズムが台頭しはじめる1923年から、村が湖の底に沈む1950年までのおよそ30年を綴った、静かな、だが決して屈することのない抵抗の物語だ。

物語は、トリーナが自らの来し方を振り返りつつ、混乱期に姿を消した最愛の娘に対して淡々と語りかけるといふ体裁をとっている。彼女の人生はじつに過酷だ。教師をめざすもファシズムによって母語を禁じられ、村はヒトラーの移住政策によって分断され、戦

時中は兵役を忌避した夫とともに極寒の山に潜み、終戦後はダムの建設計画に翻弄される。いくつもの横暴や理不尽をすべてその身に引き受けながら、トリーナは土地を慈しみ、母語を愛し、言葉の力を信じ、毅然と生きていく。支えとなったのが、生き別れた娘に向けて、出す宛でもない手紙を綴ることだった。その、強靱なまでに抑制の効いた文章の行間からは、しかし、あらゆる辛酸をなめつくした者しか知らない感情が滲み出る。

著者のマルコ・バルツァーノは1978年ミラノ生まれの、カンビエッロ賞受賞作家。2018年に発表した長篇4作目にあたる本書で、イタリア文学界の最高峰、ストレーガ賞のファイナリストに選ばれたほか、《マリオ・リゴニー・ステルン賞》など、国内外の賞を受賞。この村とダムの物語が、より親密で個人的な物語を内包し、それを通していわゆる「歴史」を濾過することができると直感し、執筆を決意した。女性の一人称で語られる小説を書くのが夢だったという著者の、渾身の一冊だ。



停電の夜に

小川高義訳 2090円 590019-9

ろうそくの下、秘密の話を――。
ピュリツァー賞ほか独占! インド系女性作家による驚異のデビュー短編集。もはや古典的名作。

ジュンパ・ラヒリ
Jhumpa Lahiri
アメリカ/イタリア
1967~



© Laura Sisson

【その他の作品】

- 見知らぬ場所 小川高義訳 2530円 590068-7
- 低地 小川高義訳 2750円 590110-3
- べつの言葉で 中嶋浩郎訳 1760円 590120-2
- わたしのいるところ 中嶋浩郎訳 1870円 590159-2
- 思い出すこと 中嶋浩郎訳 2200円 590190-5



朗読者

松永美穂訳 1980円 590018-2

十五歳の少年ミハエルが経験した切ない初恋。
母親のような年の女性ハンナを失踪させた秘密とは――衝撃の世界的ベストセラー。

ベルンハルト・シュリンク
Bernhard Schlink
ドイツ 1944~



【その他の作品】

- 夏の嘘 松永美穂訳 2200円 590100-4
- 階段を下りる女 松永美穂訳 2090円 590139-4
- オルガ 松永美穂訳 2200円 590165-3
- 別れの色彩 松永美穂訳 2310円 590186-8

新潮 Crest・ブックスが
お届けする109タイトルを
ご紹介します。
【価格は税込です】

Shincho Crest Books Catalog 1998-2023



緑の天幕

前田和泉訳 4180円 590177-6

スターリンが死んだ1950年代からソ連崩壊まで。
ロシアを代表する人気作家が、名もなき人々の
抑圧下でのドラマを描いた大河小説。

リュドミラ・ウリツカヤ
Ludmila Ulitskaya
ロシア 1943~



© Brian Cunniff

【その他の作品】

- ソーネチカ 沼野善子訳 1760円 590033-5
- 女が嘘をつくとき 沼野善子訳 1980円 590095-3
- 子供時代 沼野善子訳 1980円 590118-9
- 陽気なお葬式 奈倉有里訳 1980円 590124-0

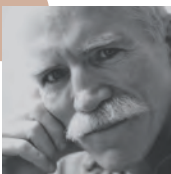


パリ左岸のピアノ工房

村松潔訳 2420円 590027-4

パリの小さな工房で、若き職人が魔法のように
再生する名器の数々……。眠っていた音楽と
ピアノへの愛が甦る傑作ノンフィクション。

T. E. カーハート
Thad E. Carhart
アイルランド/アメリカ
1950~



© S. Newland



冬の犬

中野恵津子訳 2090円 590037-3

カナダ東端の島で、犬、馬、驚く動物とともに、
祖先の声に耳を澄ませながら人生の時を刻む人々。
生の厳しさと美しさを湛えた8篇。

アリスティア・マクラウド
Alistair MacLeod
カナダ 1936~2014



© Shirley Pollock

【その他の作品】

- 彼方なる歌に耳を澄ませよ 中野恵津子訳 2420円 590045-8



すべての見えない光

藤井光訳 2970円 590129-5

ドイツの若い技術兵と、フランスの盲目の
少女の心を繋いだのは、ラジオから流れる
懐かしい声だった――。ピュリツァー賞受賞作。

アンソニー・ドーア
Anthony Doerr
アメリカ 1973~



© Amy Poehler

【その他の作品】

- シェル・コレクター 岩本正恵訳 1980円 590035-9



帰れない山
関口英子訳 2255円 590153-0

山がすべてを教えてくれた。アルプス山麓を舞台に、
本当の居場所を求めて彷徨う二人の葛藤と
友情を描く、国際的ベストセラー。

パオロ・コニエッティ
Paolo Cognetti
イタリア 1978~



【その他の作品】
フォンターネ 山小屋の生活
関口英子訳 1980円 590179-0



ある一生
浅井晶子訳 1870円 590158-5

アルプスの山とともに、20世紀を生きた
名もなき男の生涯がなぜこんなにも胸に迫るのか。
現代オーストリア文学の恩寵に満ちた物語。

ローベルト・ゼーターラー
Robert Seethaler
オーストリア 1966~



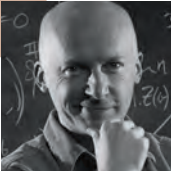
【その他の作品】
野原
浅井晶子訳 2200円 590184-4



数学が見つける近道
富永星訳 2640円 590187-5

麓の山で一本の針を探す——そんな仕事は
コリゴリ。数学者が教える、有意義に時間を使う
数学的「近道」のエッセンス集。

マーカス・デュ・ソートイ
Marcus du Sautoy
イギリス 1965~



【その他の作品】
知の果てへの旅
富永星訳 3300円 590146-2
レンブラントの身震い
富永星訳 2750円 590169-1



アコーディオン弾きの息子
金子奈美訳 3300円 590166-0

幼なじみはなぜ故郷を捨て、アメリカで没したのか。
遺された回想録から浮かび上がる波乱の人生を
描く、バスク語現代文学の傑作。

ベルナルド・アチャガ
Bernardo Atxaga
スペイン(バスク)
1951~



【その他の作品】



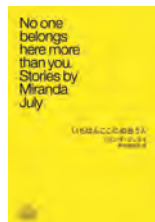
イラクサ
小竹由美子訳 2640円 590053-3

一瞬が永遠に変わるさま。長い年月を見通す
まなざし。長篇小説を凝縮したかのような味わいの、
「短篇の女王」による九つの物語。

アリス・マンロー
Alice Munro
カナダ 1931~



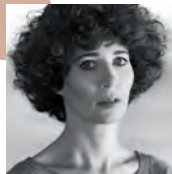
【その他の作品】
林檎の木の下で 小竹由美子訳 2640円 590058-8
ディア・ライフ 小竹由美子訳 2530円 590106-6
善き女の愛 小竹由美子訳 2640円 590114-1
ジュリエット 小竹由美子訳 2640円 590131-8
ピアノ・レッスン 小竹由美子訳 2420円 590154-7



いちばんここに似合う人
岸本佐知子訳 2090円 590085-4

孤独な魂たちが束の間放つ生の火花を、
切なく鮮やかに写し取った十六の物語。映画監督
としても活躍する著者のオコナー賞受賞作。

ミランダ・ジュライ
Miranda July
アメリカ 1974~



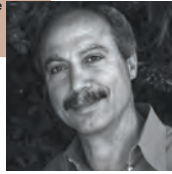
【その他の作品】
あなたを選んでくれるの
岸本佐知子訳 2530円 590119-6
最初の悪い男
岸本佐知子訳 2420円 590150-9



海と山のオムレツ
関口英子訳 2090円 590168-4

食べることはその土地と生きること。
イタリア最南端、カラブリア州出身の作家が、
絶品郷土料理と家族の記憶を綴る自伝的短篇集。

カルミネ・アバーテ
Carmine Abate
イタリア 1954~



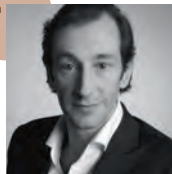
【その他の作品】
風の丘
関口英子訳 2310円 590115-8
ふたつの海のあいだで
関口英子訳 2090円 590135-6



ミッテランの帽子
吉田洋之訳 2090円 590155-4

その帽子を手にした日から、冴えない人生は
美しく輝きはじめる。1980年代のパリを舞台にした、
大人のための幸福なおとぎ話。

アントワヌ・ローラン
Antoine Laurain
フランス 1972~



【その他の作品】
赤いモレスキンの女
吉田洋之訳 1980円 590170-7
青いバステル画の男
吉田洋之訳 1870円 590185-1



ペンギンの憂鬱
沼野恭子訳 2200円 590041-0

憂鬱症のペンギンと暮らす小説家ヴィクトル。
新聞の死亡記事を書く仕事をきっかけに、
身辺に不可解な出来事が次々と起こって……。

アンドレイ・クルコフ
Andrei Kurkow
ウクライナ 1961~



恋するアダム
村松潔訳 2750円 590171-4

冴えない男と秘密を抱えた美女の間に割り込む
アンドロイド。奇妙な三角関係のゆくえは？
人とAIの文明的衝突を笑い飛ばす傑作。

イアン・マキューアン
Ian McEwan
イギリス 1948~



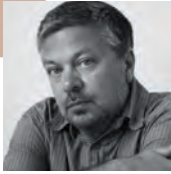
【その他の作品】
土曜日 小山太一訳 2420円 590063-2
初夜 村松潔訳 1870円 590079-3
甘美なる作戦 村松潔訳 2530円 590111-0
未成年 村松潔訳 2090円 590122-6
憂鬱な10か月 村松潔訳 1980円 590147-9



手紙
奈倉有里訳 2640円 590097-7

戦争に行った若者と残された少女。
ふたりは百年の時を隔ててめぐり会う。死を超えて、
時空を超えて綴られた、瑞々しい愛の手紙。

ミハイル・シーシキン
Mikhail Shishkin
ロシア 1961~



秋
木原善彦訳 2200円 590164-6

およそ百歳の眼が続ける老人。その人生は
EU離脱に揺れるイギリスの戦後史に重なり——
奇想に満ちたポスト・プレグジット小説。

アリ・ズミス
Ali Smith
イギリス 1962~



【その他の作品】
両方になる 木原善彦訳 2640円 590152-3
冬 木原善彦訳 2530円 590175-2
春 木原善彦訳 2530円 590180-6
夏 木原善彦訳 2750円 590181-3

Shincho Crest Books

Catalog

1998-2023

波 ソナーリ・デラニヤガラ 佐藤澄子訳 2200円 590156-1	煉瓦を運ぶ アレクサンダー・マクラウド 小竹由美子訳 2090円 590127-1
トリック エマヌエル・ベルクマン 浅井晶子訳 2750円 590157-8	誰もいないホテルで ベーター・シュタム 松永美穂訳 1870円 590128-8
ケミストリー ウェイク・ワン 小竹由美子訳 2200円 590160-8	四人の交差点 トンミ・キンヌネン 古市真由美訳 2420円 590130-1
靴ひも ドメニコ・スタルノーネ 関口英子訳 2090円 590161-5	ウインドアイ ブライアン・エヴンソン 柴田元幸訳 2200円 590132-5
西への出口 モーシン・ハミッド 藤井光訳 1980円 590162-2	本を読むひと アリス・フェルネ テュランテキスト測子訳 2090円 590133-2
友だち シーグリッド・ヌーネス 村松潔訳 2200円 590163-9	ピリー・リンの永遠の一日 ベン・ファウンテン 上岡伸雄訳 2530円 590134-9
サブリーナとコリーナ カリ・ファハルド＝アンスタイン 小竹由美子訳 2310円 590167-7	人生の段階 ジュリアン・バーンズ 土屋政雄訳 1760円 590136-3
身内のよんどころない事情により ベーター・テリン 長山さき訳 2255円 590172-1	五月の雪 クセニヤ・メルニク 小川高義訳 2200円 590137-0
地上で僕らはつかの間きらめく オーシャン・ウオン 木原善彦訳 2420円 590173-8	オープン・シティ テジュ・コール 小磯洋光訳 2090円 590138-7
ウォーターダンサー タナハシ・コーツ 上岡伸雄訳 3080円 590174-5	おじいさんに聞いた話 トーン・テレヘン 長山さき訳 1980円 590140-0
ハムネット マギー・オファーレル 小竹由美子訳 2750円 590176-9	運命と復讐 ローレン・クロフ 光野多恵子訳 2970円 590141-7
レニーとマーゴで100歳 マリアンヌ・クローニン 村松潔訳 2750円 590178-3	ノーラ・ウェブスター コルム・トビーン 榎木伸明訳 2640円 590142-4
ホットミルク デボラ・レヴィ 小澤身和孩子訳 2420円 590182-0	ファミリー・ライフ アキール・シャルマ 小野正嗣訳 1980円 590143-1
光を灯す男たち エマ・ストーネクス 小川高義訳 2640円 590183-7	昏い水 マーガレット・ドラブル 武藤浩史訳 2530円 590144-8
ある犬の飼い主の一日 サンダー・コラールト 長山さき訳 2145円 590188-2	マザリング・サンデー グレアム・スウィフト 真野泰訳 1870円 590145-5
ルクレツィアの肖像 マギー・オファーレル 小竹由美子訳 3080円 590189-9	戦時の音楽 レベッカ・マカーイ 藤井光訳 2200円 590148-6
	ガルヴェイアスの犬 ジョゼ・ルイス・バイショット 木下真穂訳 2090円 590149-3
	変わったタイプ トム・ハンクス 小川高義訳 2640円 590151-6